



ほんじゅく

元気な子に向かって ～「苦手」と「嫌い」～

2026年サッカー・ワールドカップ（W杯）北中米大会があり、6月15日には日本対オランダ戦があります。人々が心を熱くするものはたくさんありますが、その中でもスポーツは欠かせないもののように感じます。私自身は、スポーツ観戦が大好きです。

本校の運動会でも、子どもたちと教職員とが熱い思いをもち、取り組みました。表現運動を例に考えてみました。低学年では、自分の思いを大切にしながら動物になりきったり、2年生が1年生に教える場面を設定したりしました。なりきることが「できた」、教えたり教えられたりして「できた」という自己肯定感を高められました。中学年では、グループにリーダーがいて教え合ったり、少し難しい技に対してアドバイスをし合ったりするなど友達と関わり合っていました。友達がいることにより、お互いを高め合うことができました。自分でもやればできるのだと自己効力感を体感していました。高学年では、一人ではできないことでも友達と取り組み切磋琢磨したり、練習後には振り返りを行い、課題を挙げて改善していったりしました。友達とよりよいものをつくりたいという思いによって仲間の大切さや自分がそこにいる必要性に気づき、自己有用感が育ちました。この運動会という大きな行事を通して、一人一人が大きな成長を遂げました。これらの力は本校が校内研究で取り組んでいる「元気な子の育成」にもつながりました。運動会が苦手な子も、もちろん好きな子も、心に残るものになったと思います。

ところで、今年4月、6年生を対象にした全国学力・学習状況調査が行われました。国語の問題文に、辻村

深月さんの『『苦手』と『嫌い』』の一部分が出ていました。そこには「子どもの頃から、自分の『苦手』と『嫌い』について、もっと自分の言葉で整理して理解できていたらよかった」と書かれていました。「一度『苦手』とってしまうと、だんだんそのことを避けるようになるので、つい『嫌い』とってしまうがちなのですが、『苦手でも好きなこと』がある」と。「そのことに気づいたら、次はもう一歩進んで、自分がなぜそれを『苦手』なのか、どういうシチュエーションなら『好き』でいられそうか、考えてみましょう。」とありました。

先ほど、スポーツには、人の心を熱くさせるものがあると書きましたが、辻村さんの文章を読んで、他にも当てはまることがあると気付かされました。スポーツをすることは「苦手」かもしれない。でも観ることは好きな人もいます。ここで「スポーツは嫌い」と決めつけるのではなく、観ることは好き、練習なら好きと物事の見方を少し変え、ポジティブに考えるようにすることが、「楽しみ」につながるのだと思います。漢字を書くこと、計算をすることが苦手でも、本を読むことは好きだったり、図形の問題は楽しく解くことができたりします。

6月には水泳指導が始まります。もし水泳が嫌いというお子さんがいらしたのなら、「嫌い」ではなく「苦手」なのではないか、水泳のどういうことなら好きなのかなど、話題にしてみてください。他の学習や活動においても、もし前向きに捉えられないものがあつたときには、何なら好きなのかを考える機会をもたせ、子どもの成長につながるようにしたいものです。